

主 題：罪の誘惑からの勝利2

聖書箇所：エペソ人への手紙 6章18－20節

前回、私たちはサタンの誘惑に勝利して行くために、神から六つの武具をいただいていることを学びました。1) 真理：悪魔の様々な誘惑に打ち勝つてゆくために私たちは真理に従い、真理に基づいて生きて行くように。2) 正義：義とされた者として、救われた者として日々正しく聖く歩んで行くように。3) 福音：私たちはキリストの平和の証人である、救われた者は神から特別の平安をいただいた者だから、その平安によって誘惑に打ち勝つことができる。同時にそのことを人々に伝えて行くことを教えられました。4) 信仰：どんなときにも神を信頼するように、その信頼が私たちに勝利をもたらしてくれる。5) 救い：もうすでに救われた者として、日々変えられて行く者として、やがて神がくださる栄光に希望をおいて生きて行く。6) 神のことば：神のみことばという剣によって誘惑に打ち勝つてゆける。神は確かにこれらの武具を私たちのために備えてくださいました。しかし、私たちがそれを用いなければ意味がありません。どんなに立派な武具で武装したとしても、戦いに出て行かなければ、そして、そこで勝利しなければ全く無意味です。そこでパウロは、私たちがこれらの武具を用いて勝利を得るために何が必要なのか、どうすればいいのか、この武具をどのようにすれば正しく用いることができるのかを教えようとするのです。私たちが様々な誘惑に打ち勝つて行くためには神の力、神の助けが必要です。そして、この神の助けをいただくために必要なのが「祈り」だとパウロは言います。祈りによって私たちは神の力や助けをいただくことができるというのです。

パウロはこの18節から、神が備えてくださった武具を自分のものとして使って行くために、そして、悪魔の誘惑に勝利して行くために必要な「祈り」について、五つのことを教えています。

☆祈りについて

1. 祈りの姿勢について 18節

どのように祈るのかということです。「**すべての祈りと願いを用いて**」とパウロは言いました。「祈り」と「願い」を敢えて定義するなら、「祈り」は一般的な神への願いであり、「願い」は具体的な神への願いです。「すべての祈り」とはあらゆる祈りの種類を意味します。どのように祈ればいいのか、どのような形で祈るのがよく分からないということを聞きます。祈るために手を組まなければならないのか、目を閉じるのか、膝まづくのか、とか。いろいろな種類の祈りがあるとパウロは言います。目を閉じて祈るときもあるし、目を開けて祈るときも、座って祈るときも、膝まづいて祈るときも、立って祈るときも、歩きながら祈るときも、働きながら祈るときもあると。私たちがいつの間にか何かそのような形に拘ってしまって、「このような形でなければ神に聞かれない」ともし思うなら、間違った方向へ進んでしまったのです。典型的なその代表がパリサイ人です。このように祈らなければならないと彼らは思っていました。神はそのようなことを教えてはおられません。私たちのどのような祈りであっても一番大切なことは、どのような姿勢で祈るかより、どのような心で神の前に立つかです。これはイエス自身も教えられたことですし、パウロもここでいろいろな形で私たちは神の前に立つことができると教えるのです。

2. 祈りのとき 18節

いつ祈るのですか？ある人は朝早く、ある人は昼間に、ある人は夜といろいろな時間帯にお祈りされることでしょう。パウロは「**どんなときにも**」と言います。Iテサロニケ5：17でも「絶えず祈りなさい」と教えています。決められたときだけというのではないのです。祈祷会のみならず、この時間だけ祈るというのではなく、また、決められた回数だけとも言ってはなりません。確かに私たちには誘惑があります。毎日、朝早くから祈ることで神は祝してくださると。神がみことばによって教えてくださることは、何時であろうと、問題はいつ祈るかより、同じようにどのような心で神の前に立っているかです。そのことを忘れて、一日にこれだけの回数祈っているからとか、このように朝早くから祈っているから神は祈りを聞いてくださるとするなら、そのような約束はどこにも与えられていません。パウロは「**どんなときにも祈りなさい**」と言います。どんなときでも私たちは神に語りかけることができます。家事をしているとき、道を歩いているときなど「神さま…」と祈ることがあります、そのようなことです。私たちは一日のうちで何度でも神の前に立つことができ、神と交わりを持つことができます。パウロがなぜそのことが大切だと教えるのか、それは私たちが「神さま…」と語りかけるとき、神の臨在を覚えているからです。神がいつも私とともにいてくださることを覚えているから、いつでも語りかけることができます。同時に、神に語りかけることによって、私は弱い者だからいつも神の

助けが必要だと認めているのです。自らの弱さを覚えて謙虚に神の前に立つのです。そのような姿勢を神は喜ばれるのです。

3. 祈りの目的 18節

「御霊によって祈りなさい」とあります。何のために祈るのか、正しい目的をもって祈ることが大切です。往々にして私たちはこの点で間違っています。たとえば、誰かに「祈りとは何ですか？」と質問した場合、一番多く返ってくる答えは「自分の願いを叶える手段である」、ではないでしょうか？自分の欲しいものがあるとか、自分に何か不足しているものがあると思っているときは、何とかそれを得ようとしませす。そのときに用いるのが祈りであるとするのです。もし、このような祈りをしているなら、あなたは神に対して次のようなことを為しているのです。神を脅迫する（この祈りに答えてくださらなければ神に熱心に仕えて行くことを考え直さなければなりません）。神と取引をする（この祈りに答えてくだされば私はもっと喜んであなたに仕えて行きます）。神の機嫌をとる（神が喜ばれることをする、一生懸命奉仕する、祈祷会に出る、献金を捧げる、祈る、ある人は断食するなど、これだけのことをしたのだから神はこの祈りに答えてくださる）と。このような思いをもって神の前に膝まづいているなら、必ず次のような結果を自身の身に招いていることでしょうか。祈っていてもなかなか与えられないからもういい、という神への失望、本当に私のことを愛してくれているのかな？という疑い、そして、神への怒りをもつ。なぜそうなるかという、祈りが何であるかが分かっていないからです。イエスがマタイの福音書でこのように言われました。6：7「**また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。**」、これは間違っているとされるのです。では、祈りとは何なのか、祈りの目的は何なのかです。「御霊によって祈りなさい」とパウロは教えています。これは何か特別な霊的体験をすることをいっているのではありません。祈りというのは神の栄光を現わす手段であり、機会です。救われる前の私たちは、祈りとは自分の欲しいものを手にするための手段だと思っていましたが、救われ、みことばによって教えられてからは、祈りを通して神の栄光が現わされる機会であることに気が始めるのです。「御霊によって祈りなさい」とは、聖霊なる神の影響を受けて、また、聖霊なる神の助けを得て祈って行きなさいという意味です。そうすると、聖霊なる神が一体何を望んでおられるのかを考えるのです。それは明白です。父なる神の栄光を現わすことです。イエスも同じです。信者に内在される聖霊なる神は信者のうちにすばらしい働きを為しておられます。それは、ローマ8：26-27でパウロはこのように教えています。「**御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。：27 人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。**」大切なことがここに記されています。御霊、聖霊なる神が何を為しておられるかが記されているからです。「**言いようもない深いうめきによって、**」、これは聖霊なる神が、私たちが直面している弱さや苦しみを分かってくくださるからです。同時に、「**私たちのためにとりなしてください。**」、27節にも「**聖徒のためにとりなしをしてくくださるからです。**」とあるように、私たちのうちにあつて祈ってくださるのです。何を祈ってくださっているのでしょうか？27節に「**神のみこころに従って、**」とあるように、私たちクリスチャンが神のみこころに従って歩んで行けるようにと祈っておられるのです。私たちに様々な困難があることも試練があることも知ってくださって、その上で神のみこころに従って行けるようにと父なる神に祈り続けておられるのです。私たちはいろいろな祈りをしますが、その祈りによって神のすばらしさが現わされるように、神のご栄光が現わされてゆくようにと願い求めることが大切だとパウロは教えるのです。全能なる神は完全な計画をもって、それに添ってみこころを為しておられます。私たちには何か完全であるのか分かりません。また、本当に必要なものも分かっていません。それを分かっておられるのは神です。ですから、私たちはこのように祈るのです。「私にはこのような必要があります。けれども、私は何が自分に必要なのか分かっていません。何が私にとって最善なのか分かっていません。それを分かっておられるあなたにすべて委ねます。そして、どうぞ、あなたのみこころを為してください。」と、それが私たちの神に対する祈りだと言うのです。

イザヤはこのように言います。55：8、9「**わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——主の御告げ。——：9 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。**」と、ここで言われているのは神の救いのことです。神の救いは私たち人間が考え付くものではない、私たちの思いをはるかに越えたものだというのです。神の為さることは完全だと。だから、伝道者の書3：11では「**神のなさることは、すべて時になつて美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。しかし、人は、神が行なわれるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。**」とあります。「美しい」、すべて適切である、ふさわしいというのです。偶然だとか、宿命ということの人々はいいますが、神のみことばを知っている者はそのよ

うには言いません。すべてのことは神が支配しておられること、すべてのことは神の許可のもとになされていることを信じています。神はすべてのことはあなたの益のためだと言われます。全知の神がそのように言われるのです。ですから、私たちはこの神にみこころがなされるようにと祈るのです。みこころに従うとは、神が最善と思われるときにみわざを為してくださる、そのときまで待つことです。神がNOといわれるならそれを受け入れることです。そのような態度で神に祈って行くなら、神のみこころがなされ、私たちの信仰が成長して行くのです。全知全能なる神の約束をしっかり信頼することです。

4. 祈りの期間 18節

いつまで、どのくらい祈ればいいのか、ずっと祈っているけれど答えがない、一体いつまで祈ればいいのかと私たちはともすればこのように思ってしまいます。18節に「**そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。**」とあります。「目をさまして」とは、眠らないように、用心深く、警戒していなさい、油断なく番をする、という意味です。誘惑の中にいるのですから、しっかり目をさましていることが大切です。そして、「忍耐」と記されています。失望しないで祈り続けるのです。実はこのことについてイエスが教えておられるところがあります。ルカ18:1「**いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。**」とそのたとえを話して行かれるのですが、イエスはいつでも祈るべきであり、失望してはならないということをお教えたかったのです。私たちはすぐにあきらめて失望して祈ることを止めてしまうからです。17:37を見ると、「**弟子たちは答えて言った。「主よ。どこですか。」主は言われた。「死体のある所、そこに、はげたかも集まります。」**」とありますが、イエスは何をお教えたかったのか、「死体のある所」、つまりこの世のことです。大変な世の中になると、私たちはそれらを見て次第に失望をおぼえてくるのですが、そのような状況にあっても失望してはならないとイエスは教え、ひとつのたとえを話されるのです。18:2から、不正な裁判官と一人のやもめの話です。「**ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。:3 その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守ってください。』**」と言っていた。「**:4 彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、:5 どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない。』**」と言った。この不正な裁判官はだれのことでしょう？イエスではありません。イエスが教えたかったことは、不正な裁判官であったとしても、これだけうるさく言うひとりの人に対して正しいことをしようとするのではないか、だから、7節に「**まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。**」と、正しい裁判官である神は、あなたのことを放ってはおかない、正しいさばきをすると言うのです。つまり、そのような不正な裁判官と正しい裁判官である神とを比較しているのです。わたしはあなたを愛するゆえに、あなたのために正しいことをすると、神は言われるのです。だから、失望しないで祈り続けて行くようにと教えるのです。祈りが答えられるときまで忍耐をもって祈り続けなさいと言うのです。

5. 祈りの力 18-20節

私たちはなぜ祈るのかです。18節「**すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。**」パウロは祈りの力を知っていました。また、祈りがどれほど大切であるかを知っていました。私たちは聖書のある箇所から、祈りの力というものを見ることができます。それは、弟子たちの様々な失敗を見ると学ぶことができるのです。マルコの福音書14章です。最後の晩餐を終えてイエスは弟子たちとオリーブ山に出かけて行かれました。そして、ゲッセマネに来てイエスはそこでお祈りをされます。32-72「**ゲッセマネという所に来て、イエスは弟子たちに言われた。「わたしが祈る間、ここにすわっていなさい。」:33 そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネをいっしょに連れて行かれた。イエスは深く恐れもだえ始められた。:34 そして彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、目をさましていなさい。」:35 それから、イエスは少し進んで行って、地面にひれ伏し、もしできることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈り、:36 またこう言われた。「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」:37 それから、イエスは戻って来て、彼らの眠っているのを見つけ、ペテロに言われた。「シモン。眠っているのか。一時間でも目をさましていることができなかつたのか。:38 誘惑に陥らないように、目をさまして、祈り続けなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」:39 イエスは再び離れて行き、前と同じことばで祈られた。:40 そして、また戻って来て、ご覧になると、彼らは眠っていた。ひどく眠けがさしていたのである。彼らは、イエスにどう言ってよいか、わからなかつた。:41 イエスは三度目に来て、彼らに言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。もう十分です。時が来ました。見なさい。人の子は罪人たちの手に渡されます。:42 立ちなさい。さあ、行くのです。見なさい。わたしを裏切る者が近づきました。」:43 そしてすぐ、イエスがまだ話しておられるうちに、十二弟子のひとりのユダが現われた。剣や棒を手にした群衆もいっしょであった。群衆はみな、祭司長、律法学者、長老たちから差し向けられたものであった。:44 イエスを裏切る者は、彼らと前もって**

次のような合図を決めておいた。「私が口づけをするのが、その人だ。その人をつかまえて、しっかりと引いて行くのだ。」:45 それで、彼はやって来るとすぐに、イエスに近寄って、「先生。」と言って、口づけした。:46 すると人々は、イエスに手をかけて捕えた。:47 そのとき、イエスのそばに立っていたひとりが、剣を抜いて大祭司のしもべに撃ちかかり、その耳を切り落とした。:48 イエスは彼らに向かって言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしを捕えに来たのですか。:49 わたしは毎日、宮であなたがたといっしょにいて、教えていたのに、あなたがたは、わたしを捕えなかったのです。しかし、こうなったのは聖書のことばが実現するためです。」:50 すると、みながイエスを見捨てて、逃げてしまった。:51 ある青年が、素はだに亜麻布を一枚まとったままで、イエスについて行ったところ、人々は彼を捕えようとした。:52 すると、彼は亜麻布を脱ぎ捨てて、はだかで逃げた。:53 彼らがイエスを大祭司のところに連れて行くと、祭司長、長老、律法学者たちがみな、集まって来た。:54 ペテロは、遠くからイエスのあとをつけながら、大祭司の庭の中まではいつて行った。そして、役人たちといっしょにすわって、火にあたっていた。:55 さて、祭司長たちと全議会は、イエスを死刑にするために、イエスを訴える証拠をつかもうと努めたが、何も見つからなかった。:56 イエスに対する偽証をした者は多かったが、一致しなかったのである。:57 すると、数人が立ち上がり、イエスに対する偽証をして、次のように言った。:58 「私たちは、この人が『わたしは手で造られたこの神殿をこわして、三日のうちに、手で造られない別の神殿を造って見せる。』』と言うのを聞きました。」:59 しかし、この点でも証言は一致しなかった。:60 そこで大祭司が立ち上がり、真中に進み出てイエスに尋ねて言った。「何も答えないのですか。この人たちが、あなたに不利な証言をしています、これはどうなのですか。」:61 しかし、イエスは黙ったままで、何もお答えにならなかった。大祭司は、さらにイエスに尋ねて言った。「あなたは、ほむべき方の子、キリストですか。」:62 そこでイエスは言われた。「わたしは、それです。人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るはずです。」:63 すると、大祭司は、自分の衣を引き裂いて言った。「これでもまだ、証人が必要でしょうか。:64 あなたがたは、神をけがすこのことばを聞いたのです。どう考えますか。」すると、彼らは全員で、イエスには死刑に当たる罪があると決めた。:65 そうして、ある人々は、イエスにつばきをかけ、御顔をおおい、こぶしでなぐりつけ、「言い当てて見ろ。」などと言ったりし始めた。また、役人たちは、イエスを受け取って、平手で打った。:66 ペテロが下の庭にいと、大祭司の女中のひとりが来て、:67 ペテロが火にあたっているのを見かけ、彼をじっと見つめて、言った。「あなたも、あのナザレ人、あのイエスといっしょにいましたね。」:68 しかし、ペテロはそれを打ち消して、「何を言っているのか、わからない。見当もつかない。」と言って、出口のほうへと出て行った。:69 すると女中は、ペテロを見て、そばに立っていた人たちに、また、「この人はあの仲間です。」と言いだした。:70 しかし、ペテロは再び打ち消した。しばらくすると、そばに立っていたその人たちが、またペテロに言った。「確かに、あなたはあの仲間だ。ガリラヤ人なのだから。」:71 しかし、彼はのろいをかけて誓い始め、「私は、あなたがたの話しているその人を知りません。」と言った。:72 するとすぐに、鶏が、二度目に鳴いた。そこでペテロは、「鶏が二度鳴く前に、あなたは、わたしを知らないと言います。」というイエスのおことばを思い出した。それに思い当たったとき、彼は泣き出した。」

イエスは弟子たちに祈って待つように言われました。「誘惑に陥らないように、目をさまして、祈り続けなさい。」と。しかし、彼らは祈ることができないで眠ってしまいました。油断したのです。そして、彼らに祈りが無い状態でその後、大変な出来事が起こって行きます。イエスが捕らえられたのです。47節に「そのとき、イエスのそばに立っていたひとりが、剣を抜いて大祭司のしもべに撃ちかかり、その耳を切り落とした。」とあり、これがペテロであることは他の福音書からも明らかです。ペテロは何とかイエスを守ろうとしたのです。でも、ペテロは大切なことを見落としているのです。イエスがこれからわたしは十字架にかかること、そして、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きますという28節のことばを聞いていたはずなのです。しかし、ペテロは何とか自分の手でイエスを守らなければならないと思ったのです。神の計画より自分の考えを優先させたのです。ですから、祈りにおいておろそかになっていると、神の計画に逆らうような行動をしてしまうのです。そして、二つ目に弟子たちはどうだったでしょう？イエスのことよりも自分のことを優先したのです。50節「みながイエスを見捨てて、逃げてしまった。:51 ある青年が、素はだに亜麻布を一枚まとったままで、イエスについて行ったところ、人々は彼を捕えようとした。:52 すると、彼は亜麻布を脱ぎ捨てて、はだかで逃げた。」とあります。「ある青年」、これは他の福音書を見るとヨハネのことだといわれます。イエスが愛された弟子が最後にはイエスのために死ぬことより、自分のいのちの方が惜しくなったのです。そのすぐ前にペテロはこのように言っています。31節「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」みなもの者もそう言った。」、周りにいた弟子たちも同意したことでしょう。それが皆イエスよりも自分の身を案じて離れていつてしまったのです。そして、66節からペテロの三度のイエスへの否定を見るのです。「私はその人を知りません」と。豪語していたペテロはどこにいったのでしょうか？弟子たちはこの大きな誘惑が襲う前に、イエスが言われたように、祈りをもってそのときに備えるはずでした。しかし、彼らは誘惑に負け失敗してしまっただけです。

私たちの信仰生活に祈りがどれほど大切であるかをもう十分学んできました。よく「私は祈ることしかできません」と言われますが、祈りほど力のあるものはないのです。病の床にあらうと祈ることはできます。その祈りによって神のすばらしいみわざが成されて行くのです。祈らなければ神のみわざが成

されないのではありません。しかし、祈ることによって成されたみわざを見たときに、私たちは神に感謝をささげ、賛美をささげ、礼拝をささげることによって、自らの信仰が強められて行くのです。

私は1979年宣教師として受け入れられたとき、自分の働きのためのサポートを集めなければなりませんでした。限られた期間内で教会を訪ねて話をしましたが、多くの方々から祈りのサポートをいただきました。祈りは力をもっています。全能の神の前にとりなすのです。私たち子どもでも大人でも、健康でも病弱でも、どんな人にもできる働きであり、そして、最も大切な働き、それは神の前に祈りをささげることです。神の栄光が現わされる機会として、神を崇めながら神の前に私たちは人々のためにとりなしを成すことができるのです。そして、成されるすばらしい主のみわざ、それは必ずしも私たちが求めたことではないとしても、私たちは感謝をささげ、神を誉め称えるのです。このようなすばらしい祈りという特権を神は私たちにくださったのです。私は3ヶ月ですべてのサポートをもらってグアム島へ遣わされました。神が必要をくださるのです。私たちはいつでもお互いのために祈り合っているのです。あなたには祈りができます。祈りでサポートすることができるのです。パウロはそのことがよく分かっていました。だから「すべての聖徒のために祈りなさい」と言ったのです。

そして、19、20節で彼は自分のためにこのような祈禱課題を挙げました。「**また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるようにも祈ってください。:20 私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。**」、パウロは投獄されていました。キリストの福音を語ったからです。「福音の奥義を」と言いました。つまり、ユダヤ人であろうと異邦人であろうとキリストにあって信じるすべての人が救われてひとつのからだ、キリストのからだにつながる、キリストが唯一の救い主であり、この方によって救われるのだというメッセージを語ったのです。その結果、彼は牢に入れられたのです。彼に敵対した者は、これで福音のメッセージが出て行くことはない、福音の火は消えるだろうと思っていたことでしょう。しかし、パウロの祈りを見ると、パウロはそのような状況にあっても、大胆に語ることを神に求め、人々に求めたのです。そして、彼は「語るべきことばが与えられ」と神に知恵を求めました。神の知恵をいただいて正しいことを語れるようにと。私たちにも知恵が必要です。そして、神から勇気をいただくことも必要です。恐れることなく神のことばを語って行くことです。

パウロはそのように求めました。なぜなら、パウロは神の力、祈りの力を知っていたからです。そして、彼自身祈りが必要であることを知っていました。あなたは祈りをこのように捉えておられたでしょうか？祈りは形ではなく心であること、神の力を信じて祈り続けて行くようにと教えられました。このような祈りを私たちが為して行くとき、神から与えられた武具を用いて誘惑に打ち勝ちます。その武具を用いるために必要な力を私たちが用いて戦って行くためには、神が教えてくださった「祈り」によることを教えられました。神からこの力をいただきながら、この週もそれぞれの信仰生活を歩んで行きましょう。神は私たちに勝利を約束してくださった、神の力によってそれを得ることができるのです。